

# オーロラさんの館



コムギちゃんの心

～疫病神よ、さようなら

作者 フルーツとタルト

M.I

## コムギちゃんの心～疫病神よ、さようなら

1月最初のメニューは、フランスの家庭料理ポトフ。

新たな年を迎え、元気な姿で顔を合わせた生徒たちが挨拶を交わす。料理中、そして完成品の試食中も会話が弾み、身も心も温まった様子で帰っていった。

楽しく賑やかだった余韻が残る中、オレオはミルク、オーロラさんは気持ちも落ち着くハーブティーでひとやすみ。そこに、さっきまで料理教室に居た橙さんが大粒の涙を流しながら戻ってきた。

「あら、橙さん忘れもの？橙さん、泣いているの？どうしたの？」

「分からないんです。急に涙が出て来て止まらないんです。悲しい事や泣きたい事なんて何一つ無いのに、涙がポロポロと溢れて来るんです・・・」

めったに吠えないオレオが、珍しくワンワンと激しく吠えた。

その様子を見たオーロラさんが尋ねた。

「橙さんちには、ワンちゃんいるの？」

「はい、います。プードルのコムギって3歳の子がいます」

「涙の原因はソレよ。コムギちゃんは、自分の寿命が近い事を知っているのね。体に病気を持って生まれてきたのよ。それで死が近づいている事を自分で気付いているの。橙さんと離れるのが嫌で嫌で、寂しくて仕方がないのね。その心が橙さんに伝わって橙さんを泣かせているの」

「そんな・・・コムギが・・・」

「落ち着いて。まず病院で一度検査をして、病気の原因を調べるのよ。今なら何とかギリギリ、死はまぬがれるかもしれないわ。なかなか動物の病気には気づきにくいものだから、こうやって以心伝心で知らせてきたのね。橙さんは本当にコムギちゃんを可愛がって大事にしているから」  
まだ橙さんの涙は止まらない。

「ほら、急いで帰って病院に行って来なさいよ！急ぎよ！早く早く、明日じゃダメよー！」



次の日、また泣きながら橙さんはオーロラさんのところへやって来た。

「コムギの病気はもう治らないだろうって、獣医の先生に言われて・・・そう長くはないでしょうって・・・」

「まあ」

「オーロラさん、なんとかコムギを助けられないでしょうか。大切な家族なんです」

「そうね・・・」

オーロラさんは、オレオを撫でながら目を閉じた。

「あら、コムギちゃんには疫病神が憑いているわ」

「疫病神！そんな・・・追い払えないんですか？」

「お小遣いをくれたら、引き払ってもいいって言ってるわね」

「えっ？お小遣いですか？」

「そう言ってるわよ」

「分かりました。すぐにでも用意します。オーロラさん、ぜひ助けてください！」

そうして疫病神には、希望の額のお小遣いを渡して、コムギちゃんからはお引き取りいただいたのだった。

その後コムギちゃんは一命を取りとめ、橙さんは前よりも一層コムギちゃんとの時間を大切に過ごしている。